

Book Review

“力”のマネージング “力”のコンプレックス・シンドロームを超えて

池田雅彦 著



Reviewer

宮地建夫 Tateo Miyachi

(東京都・歯科診療室新宿 NS)

A4判, 128頁
オールカラー
定価 (7,500円+税)
医歯薬出版刊



どうすれば

“力”を見たひとはいない。でもそこに居ることは知っている。いたずら好きでときに噛みつくからなんとかしたいが、ペットのようには躡けられない。どの程度の力がどのように加わったときに、なにが起こるのだろうかというのが素朴な疑問で、どうすればトラブルを、歯の喪失拡大を抑えられるのかそれが知りたい。

可視化

私なんかはとっくに諦めているが、得体の知れない摩訶不思議な力について、多年にわたりその謎解きに真正面から挑戦しているのがここでご紹介する池田雅彦氏とその著書『“力”のマネージング』だ。

冒頭で氏はこう述べられている。

『患者の口腔に現れる症状が本当に“力”が関与したものかどうか、関与しているとすればどのような種類の“力”がどのように関与しているのか、真実を知りたかった』

これが、力へ関心をもった動機だったという。これには驚いた。40年前にそう思ったのか、その後紆余曲折の長い熟成期間の末の言葉なのか、その

「力へ向けた臨床眼」には感服する。脱帽だ。

若い歯科医の症例報告では、往々にして目が逆になる。咬耗や摩耗、破折や骨隆起、補綴装置の破損や脱落といった“口腔に現れる症状”から力を見に行こうとしている。そうすると“口腔に現れる症状”が説明変量になってしまう。臨床では“口腔に現れる症状”がそして最終的には歯の延命こそが目的変量にならなくてはならないはずなのに、“口腔に現れる症状”によって力を探り出したつもりで、とって返して“口腔に現れる症状”を説明しようとするから、同語反復つまりトートロジーになってしまっている。氏は“諸症状と力”の関与を調べていくために、独自の池田式ブラキシズム評価法で力を可視化した。オクルーザルスプリントを中心に据えた客観的な力(SB=Sleep Bruxism)の評価法によってブラキシズムの定性・定量的な評価が可能になることを突き止めた。

意味化

力への客観的な物差しを手にし、そこで捉えた力が“口腔に現れる症状”とどのように関連しているかを詰めて

いく。その攻め方こそが力へ対峙する正攻法であることが、著書からじんと伝わってくる。繰り返しになるが、どんなスプリントでも「力をみた」わけではない。リンゴの落下から万有引力を読んだように、スプリントからの情報を力に翻訳する目がなくてはならない。多分、それは氏の臨床の継続から生まれたのだろう。五感のなかに蓄積されたビックデータからスプリントからなにをどう読むかという目や技を磨いたからこそ、睡眠時や覚醒時や咀嚼時やらの異常な力の影が池田氏には丸見えになったのではないか。

本書には最終段階とも言える力のコントロールの実際について症例検討されているが、そこだけのつまみ食いはやめたほうが良い。初めからスプリントを見て一気に何がわかるというものではないだろう。力を読む方法論・道具をまず身につけて、それを自身の臨床経験によって積み重ねていく覚悟が必要なのかもしれない。まず氏が獲得した目をこのアトラスを通して疑似体験することが、方向を誤らないためには不可欠なのではと思いながら読んだ。